企画展「行者塚古墳の埴輪と土製品」解説シート

〔西条古墳群の概要〕

西条古墳群は、現在の西条山手１丁目から山手２丁目にかけて分布する古墳群です。かつては 40 基ほどの古墳がありましたが、昭和 38（1963）年にはじまった県営神野団地の造成工事によって、行者塚古墳、人塚古墳、尼塚古墳の３基の古墳を除くほぼすべての古墳が破壊されてしまいました。その後、幸いにも破壊を免れた行者塚・人塚・尼塚古墳については、「播磨における古墳時代の成立発展を考えるうえで貴重な遺跡」であるとして、昭和 48（1973）年に国史跡に指定されるとともに、平成７（1995）年以降、史跡整備に伴う発掘調査が断続的に実施されました。

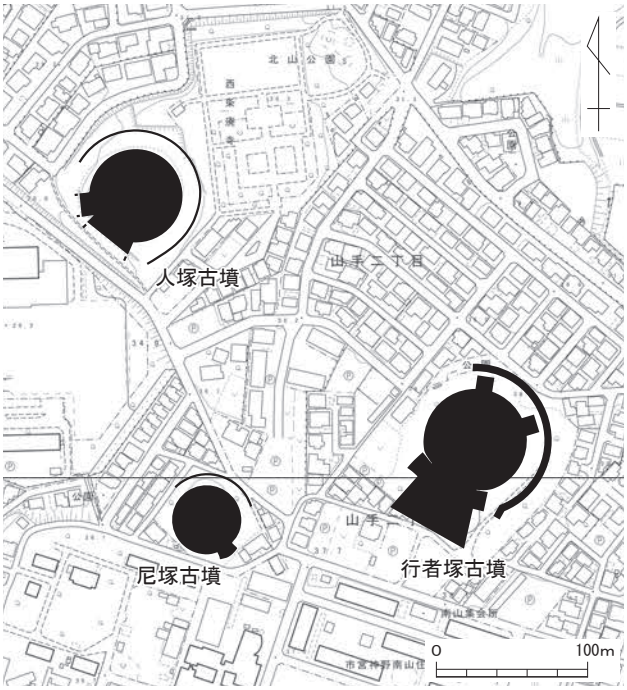

図１　西条古墳群分布図

〔行者塚古墳の概要〕

行者塚古墳は、後円部と前方部にそれぞれ２基、計４基の造り出しをもつ全長約 99 ｍの前方後円墳です。墳丘の周囲には幅約 11 ｍの鍵穴形の周濠がめぐっており、一部では外堤や外周溝の存在も確認されています。墳丘は３段築成で、各斜面には葺石が施されています。また、各段の平坦面には多数の円筒埴輪がめぐらされているほか、後円部頂部、西造り出しや北東造り出しなどでは様々な形象埴輪が出土しています。

埋葬施設は、後円部頂部の墓壙で３基の粘土槨が確認されているほか、北東造り出しにおいて１基の粘土槨が確認されています。後円部頂部の埋葬施設では、晋式帯金具や鍑などの大陸系文物や、各種鉄製武器や農工具、鉄鋌などの多種多様な副葬品を収めた副葬品箱（いわゆる「中央副葬品箱」と「西副葬品箱」）が発見されています。

〔行者塚古墳の埴輪、土製品・土器〕

○円筒埴輪

行者塚古墳では、墳丘の各段平坦面や各造り出しに円筒埴輪（朝顔形・鰭付を含む）が多数めぐらされていました。発掘調査で情報の得られていない東造り出しを除いて、その数は 2100 本以上と推定されています。分析の結果、行者塚古墳の円筒埴輪は、その形態や大きさなどから、大きく３つの規格（Ａ型・Ｂ型・Ｃ型）、細分すると８つの規格によって作り分けられたものが存在していることがわかりました。また、これらの埴輪は、規格によって製作技術に違いがみられるため、複数の工人集団によって作られたものであることが明らかとなりました。

このほか、これらの円筒埴輪の墳丘上での配列場所をみると、Ａ型は墳丘西側の後円部・前方部第１段平坦面に、Ｂ型は東くびれ部の後円部・前方部第１段平坦面や前方部第２段平坦面などに配置されており、各規格によって配列場所が異なっていることもわかりました。

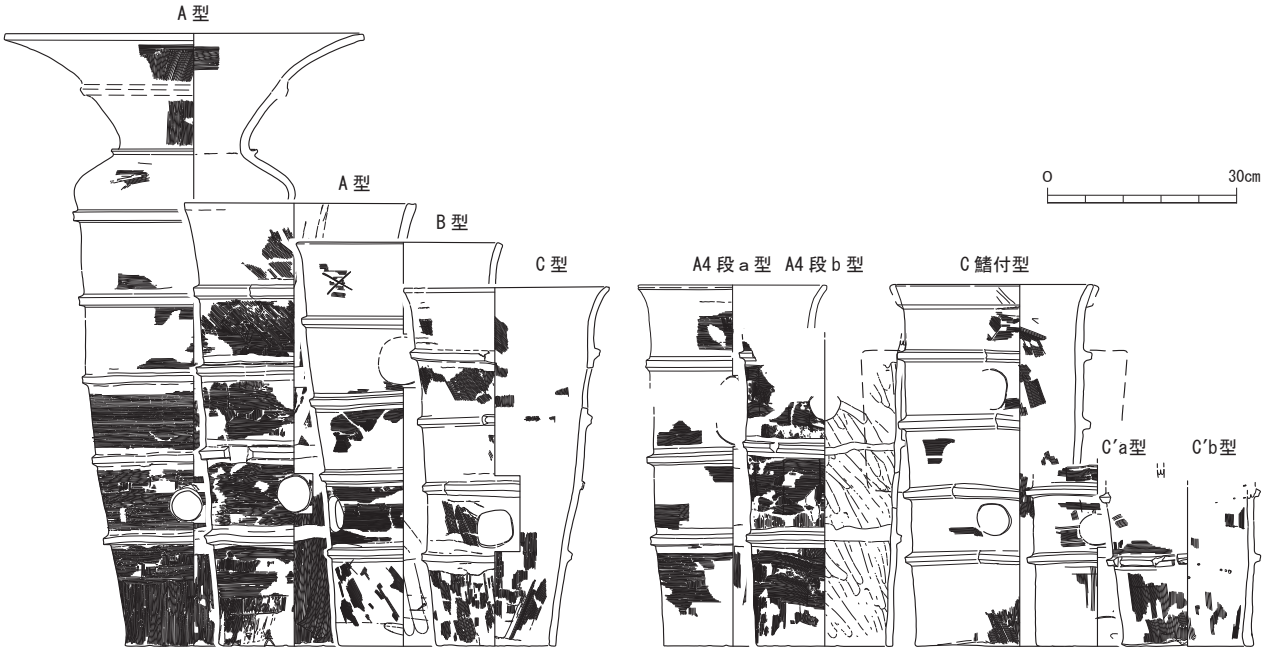

図２　行者塚古墳の円筒埴輪

○形象埴輪

行者塚古墳では、後円部頂部や各造り出し、くびれ部の谷部などの特定の場所から形象埴輪が出土しています。西造り出しでは土製品や土器とともに数多くの家形埴輪が配置されていたほか、北東造り出しでは粘土槨の上に家形埴輪と並んで甲冑形・盾形・靫形埴輪といった武具形の器財埴輪が配置されていました。このほか、東くびれ部の谷部では、古墳時代の「水」にまつわる祭祀に関連するとみられる樋形土製品（導水施設形埴輪）とともに囲形・家形埴輪が出土しています。場所によって配置される形象埴輪に違いがあり、それぞれ異なる意味や役割が与えられていたものと考えられます。

図３　行者塚古墳の形象埴輪、土製品と土器
（写真提供：大手前大学史学研究所）

○土製品・土器

行者塚古墳では各造り出しを中心に土製品と土器が出土しています。特に西造り出しでは、笊形土器や小型の土師器（坩・壺・器台・高杯）とともに、魚や鳥、あけびの実や菱の実などを象ったとみられる食物形土製品が多数出土しており、これらのものはもともと笊形土器や高杯の上に載せられていたと考えられます。また、その出土状況や、同じ方形埴輪列で出土した多数の家形埴輪との配置状況から、これらの土製品と土器は家形埴輪群に対する食物供献を示すものと考えられます。

企画展「行者塚古墳の埴輪と土製品」解説シート
令和６年７月27日
編集・発行：加古川市教育委員会・加古川総合文化センター